

2025 年度聖学院大学大学院

春期入学試験問題

[文化総合学研究科]  
博士前期課程  
論述試験（60分）

<注意事項>

- ① 監督者の指示があるまで、この問題用紙を開かないで下さい。
- ② 監督者の指示により、解答を止めて下さい。
- ③ 試験終了後、問題用紙と解答用紙を回収します。
- ④ 机の上には、受験票・筆記用具のみを置いて下さい。
- ⑤ 質問等がある場合は、静かに挙手して監督者を待って下さい。

受験 番号		氏 名	
----------	--	-----	--

同封の論述試験問題について、解答用紙に解答しなさい。

なお、解答用紙に、選択したコース・テーマを記入しなさい。

（例： コース・分野・テーマ〔 日本文化学 文学 日本漢文 〕

【日本文化学 文学 日本漢文】

資料①(台湾故宮博物院蔵『蒙求』)ならびに資料②(岡白駒『箋註蒙求校本』)について以下の設問に答えよ。

資料①(台湾故宮博物院蔵『蒙求』)／卻説一枝・載憑重席)

権合り開  
作都よ公  
著のに非

資料②(岡白駒『箋註蒙求校本』)／卻説一枝・載憑重席)

都合の都  
権の合  
作の作  
著の著  
ののの  
にのに  
非の非  
公の公  
開の開

【設問一】『蒙求』について知るところを記せ。

【設問二】資料①「故宮博物院蔵『蒙求』」の「標題」の八字のそれぞれの四隅に付された「○」の記号について解説せよ。

権合り開  
作都よ公  
著のに非

【設問三】資料①と資料②は「卻詵一枝」の出典について『晋書』を注に引用している。両者の引用を比較すると相違する箇所が極めて多いことが分かる。この点について考察するところを記せ。

【設問四】資料①と資料②は「載憑重席」の出典について、前者は『後漢書』、後者は『東觀漢記』を注に引用している。この相違点について考察するところを記せ。

【設問五】『蒙求』の日本への影響について知るところを記せ。

引載資料の出典

- 資料① 池田利夫編『蒙求古註集成』上巻／汲古書院／一九八八年一月／二〇～二二頁  
資料② 岡白駒『箋註蒙求校本』中文出版／一九九六年三月／四七～四八頁

聖学院大学大学院 文化総合学研究科博士前期課程  
入学試験問題解答例等

入試実施年度	問題番号	試験科目名
2025 春期 (24 年度実施)	MAJL-A-001	文化総合学研究科博士前期課程専門科目 日本文化学/日本漢文

・ 入試問題解答例等

【設問】

別紙試験問題「MAJL-A-001」参照

以下、各設問の「出題意図」を記し、解答におけるポイントを記す。

【設問一】

「設問一」は『蒙求』という作品についての基礎的な知識を問うている。

当該作品が元来は四字句の韻文形式の作品で、上二字を人名、下二字を故事、そして二句一對の形式で構成されていること、また、この作品には各句の出典からの引用による注が付されており、これを作者李翰の「自注」とするか、あるいは「他注」とするか、そして宋代の徐子光によって整備された「新注」とそれ以前の「古注」との関係を正しく理解していることを述べる必要がある。また、この注を含む『蒙求』という作品が中国および日本において「幼学」の書として広く普及し、特に日本においては平安時代以降明治時代に至るまで、広く享受され、様々な文学作品におけるその影響が指摘されている。この点については「設問五」に述べる必要がある。採点については基本的には加点法で行い、事実誤認等は加点对象としない。

【設問二】

「設問二」は写本から基本的な情報を読み取る力を問う問題である。

この記号は「声点」であり、当該漢字のアクセント(四声)を明示するものである。この四声(平声・上声・去声・入声)についての基本的な事項の理解を解答に反映しつつ、この声点が日本の写本に施されていることの意味について言及できれば出題の意図に充分に答えていると判断される。

【設問三】

「設問三」は資料①②に引用されている『晋書』の本文が異なることについて、その理由を考察させえる出題である。解答は資料②の徐子光注(新注)が正史『晋書』からの引用であるのに対し、資料①(古注)が引用する『晋書』の本文が一致しないことから、資料①が引用する『晋書』が現行本の『晋書』とは異なる『晋書』からの引用であると推理することが求められている。解答においては『晋書』についての基本的な理解として、現行本『晋書』が唐・太宗の奉勅撰であり、『晋書』という同名の作品が複数存在していたことを踏まえた記述が求められる。

**【設問四】**

「設問四」は後漢時代の歴史を記す『後漢書』と『東観漢記』についての理解を問う設問である。

「三史」と呼ばれる史書は、『史記』『漢書』『東観漢記』の三書から、『史記』『漢書』『後漢書』の三書へと変化するが、『東観漢記』と『後漢書』についての基礎的な事項を理解していれば比較的容易に解答を整えることができよう。

**【設問五】**

「設問五」は「設問一」における解説を参照されたい。